　　　　　　「ぼくは写真で世界とつながる」　  
  
　いわゆる自閉症という人と関わったことがある人なら、この映画の主人公の祐二さんが、“立派な”自閉症だということがすぐ分かる。そして、祐二さんのこの沖縄旅行、初めての場所に、初めて乗る飛行機で、家族でも施設職員でもない人と一緒に行く、ということが、いかに「自閉症」の人にとって無謀なことか、わかる。しかし、祐二さんは行くのです。それは、沖縄で夕陽の写真を撮りたいから。その一心で、苦手なマスクさえも付けて。出発の直前まで、熱を出して、「ダメだー」と叫びながらも。

　　　　　　　　はじめは、映画にするつもりなどなかったという貞末さん。祐二さんは、初めての出会いから、貞末さんを同行者として巻き込み、貞末さんも思わずお世話を焼きながら、カメラを回し続ける。こんなドキュメンタリー映画ってあるのかしら、と思ってしまう。でもそれが、この映画に、私たちを近づけ、本物だと納得し、嬉しくなる。

　　　　　　　　祐二さんの写真が素晴らしい。パシャパシャたくさん撮った中の１枚を選ぶのではなく、撮るのは1枚。彼は、対象に向き合った瞬間に、完成した絵が頭に浮かぶのではないだろうか。まさに「天才」。鳥が、魚が、祐二さんに、撮ってよといっているように見える。ことばでは伝えられない思いを彼の写真が表現している。祐二さんは写真だけど、きっと思いがあるのは、他の人も同じ。そう思うことは今までも度々あったが、祐二さんが証明してくれたことで、確信できるし勇気がわく。

　　　　　　　　圧巻は、家族の取材。多動で、偏食で、まさに大変だった幼児期のこと。祐二さんを臆面なく「宿敵」と呼ぶお兄ちゃんの思わずついて出る本音。上映会では、家族の方からの感想に、共感したという声が多かった。

　　　　　　　　療育ねっとわーく川崎は、障害者支援をしているＮＰＯだ。前作の「普通に生きる」に惚れ込んで、3回も上映会を開いた。それを契機に、毎年映画会をしようと決めている。思い切って今回は、区民館の大ホールを借りてしまった。内輪の人だけだろうと思っていたら、思いがけず一般の方も多く観て下さった。この映画を観て、がんばりたいとの感想もあった。やっぱりそうだ。祐二さんには、関係者だけでなく、誰もが励まされるのだ。映画会が、地域との新たなつながりを作ってくれることを実感させてくれた。私たちにとっても、貴重な体験となった。祐二さんに、ご家族に、映画の製作者に、心からの感謝をしたい。もうすでに、次回はいつやるのか、問い合わせが来ている。来年も、大ホールで上映会をやりますよ。

特定非営利活動法人  
療育ねっとわーく川崎  
谷　みどり